

第11回山口市中心市街地活性化協議会報告（要約）

1. 日 時 平成20年9月29日(月) 19:15～20:30
2. 場 所 山口商工会議所5階コミュニティホール
3. 出席者 19名
4. 内 容

【報告事項】

1. やまぐち秋の彩りフェスタの開催内容について

山口市中心市街地活性化基本計画の変更・追加箇所について山口市から説明。

①商業統計調査の小売業年間商品販売額→商業統計調査や経済センサスの小売業年間商品販売額。

②計画期間中、平成21年に商業統計（簡易）調査が実施され、平成20年度の実績値が集計されることから、中間年度の目標値も設定→計画期間中、平成23年に経済センサス調査が実施され、平成22年度の実績値が集計されることから、平成22年度の目標も設定。

③追加年間商品販売額の増加予測推計

98億1,700万(平成22年度仮に各種事業等を行わなかった場合推計額)100億(平成22年度年間商品販売額目標)

④各事業における年間商品販売額の増加予測推計の平成20年度、23年度を→平成22年度、23年度へ変更。

⑤商業統計調査は平成19年に実施され、経済センサスが平成23年に実施される予定。独自に調査するとともに、中間年次(平成21年度)にアンケート調査を実施し、状況に応じて必要な措置を講じる。

⑥追加 認定しと連携した特別措置に関する事業

⑦削除 (4)国の支援がないその他の事業より、「中心市街地情報提供事業」

④追加 認定と連携した支援措置のうち、認定と連携した特例措置に関する事業

・中心市街地と周辺の様々な文化資源を活用した新たな魅力創造を図る事業

・中心市街地が一体となって「魅力ある商業空間」創造し、それを体感できるようなイベントを新たに実施し、まちのイメージアップに向けて、新たな魅力と賑わいを創出する事業。

2. きぎょうサポート・センター事業の進捗状況について

事務局から別添資料に基づき、レンタルボックス「街知箱(まっちばこ)」の出店状況、出店者数について説明。続いて、チャレンジショップ「夢蔵」の出店状況、今後の出店予定について説明。

3. ばるるプラザ横の山口都市開発公社所有地売却について

(1) ばるるプラザ横の山口市土地開発公社所有地売却の対応について

コープやまぐちから、別添資料に基づき説明。コープやまぐちとして、市基本計画アルビ跡地の再整備ができていない、お互いが連携して計画を誠実に実行するために、今回の市(公社)所有地の売却は取り止めて欲しい旨の意見があった。

各委員からの意見をまとめると次の通り。

【アルク立地に賛成の立場での意見等】

- 1 中心市街地外と中心市街地での競争ではなく、中心市街地内での業者間の競争が起こることは良いのではないかと。中心市街地の商業機能が集積する可能性のために仕掛けていくのは良い。消費者は、買う商品を店ごとに買い分けているのであるから、差別化をすれば良いのではないかと。
それよりも、山口市の交通体系整備の遅れの方が問題である。出店後の交通渋滞の問題は、この視点から解決する必要がある。
- 2 地域住民に対して事前に聞き取り調査を行った。その結果、地域住民がコープに慣れ親しんできたので撤退してもらっては困るが、アルクの出店により利便性が増すことは良いことである。コープとアルクが競争して商業機能が充実してくるのは良いことである。しかし、コープが無くなるとは困るという声もあった。危惧するのは、アルク出店場所については、現状でも交通渋滞がある場所なので、交通渋滞問題を解決して欲しい。
この問題は、山口市全体の核として中心市街地を捉えるのか、中心市街地の中だけの核を考えるのかという問題である。また、これを機会に山口駅周辺の整備も考えていかななくてはならないのではないかと。
- 3 選択肢が増えることは、生活者にとって便利になるということである。山口線の待ち時間があるときに、時間潰しに買い物が可能になって良いのではないかと。公共交通機関の利用もしやすくなる。アルクとコープが近い場所にあるので移動しやすく便利である。
高齢化が進行すると、近い所にしか出られない高齢者が増えるので、買い回りができるのは便利である。
- 4 アルクの出店は、郊外に買い物に行っていた消費者を中心市街地に取り込むことに効果がある。また、コープは歩いていける所。ニーズを把握してみるとどちらも良い集客施設になると思う。

【アルク立地に反対の立場での意見等】

- 1 中心市街地活性化は、「時勢に逆行するとも言えるほどの困難なテーマ」であることを理解・認識し、中心市街地活性化基本計画に掲載された商業活性化に関する諸事業の実施が出来ていない段階で、新たな商業施設を誘引して集客の分散をすることは避けていただきたい。
また、中心市街地の活性化については、基本計画の中に市民、事業者、中心市街地活性化協議会、行政がこれまで以上の連携を図り事業を展開していくこととなっているので、このことを誠実に実行し、事業者が意欲的に活性化諸事業に取り組めるような状況を目指していただきたい。
以上のことから、土地売却は取りやめていただきたい。
- 2 西門前商店街は、どうもんパークの賑わいに依存している。集客がもどりつつあるこの時機に、アルクの進出で変わる可能性がある。アルクが出来ると人の流れが駅通りに向かう

ことになるのではないかと危惧している。また、コープが撤退すると西門前商店街の衰退につながる。

アルク出店によりどうもんパークの集客力が弱くなった時には、道場門前商店街振興組合も返済が困難になる。

- 3 事業者と消費者との立場は異なるものだが、商業者まで賛成ということで大変驚いている。山口市が根拠としている数字は、コープ出店時に行ったアンケート調査であり、現在は、コープが売り場面積を増やして出店しているので、根拠とならない。生活の用が足せるということと、選択肢が増えるということとは違うのではないか。中心市街地活性化基本計画は、クロスモールが基本。要は75haの中で生活の用が足せること。わずか75haの中で、アルビ跡地開発を含めた3店舗の立地は不可能といえる。中活の基本からはずれている。我々は命を懸けている。ここに生活する人々が豊かな生活を送ることが目標であって、血を流して倒れることはできない。
- 4 コープは、まちづくりに参加することが大切であるという結論で、不利な立地に出店を決定した。コープは、採算が合わなくなったら撤退すればよいのであるが、商店街の個店の方はそうはいかない。困るのは商店街の人ではないかと思う。
- 5 消費者の選択が増えるという主張はもっともである。しかし、なかなかそのようなマーケットではないことを理解して欲しい。コープ内での反対や専用駐車場がないという問題もありながら、そうした中で、市と呼応してまちづくりを進めることが良いことであると判断して進めてきた。売場面積もまだ中途半端である。
- 6 商店街を守るということは、大変厳しい状況である。商店街を守ることが本当に必要なのか疑問を感じることもある。このような中、大型店が商店街の中に出店してくるのは、大型店にとっては、火中の栗を拾うようなものであるという人もいるが、商店街もその気持ちに十分応えていないように感じる。コープが撤退されると大変厳しい状況となる。どこまでが商店街なのかということは難しいテーマである。

(2) アルビ跡地開発計画について

中市のアルビ跡地開発計画について、事務局から進捗状況について説明。

以上